

## インタビュー

# 国際公会計基準審議会 (IPSASB) Andreas Bergmann議長に訊く ～国際公会計基準審議会の最新動向と日本への影響～

(前列左)  
国際公会計基準審議会 (IPSASB) 議長

**Andreas  
Bergmann**

(前列右)  
日本公認会計士協会  
公会計・監査担当常務理事

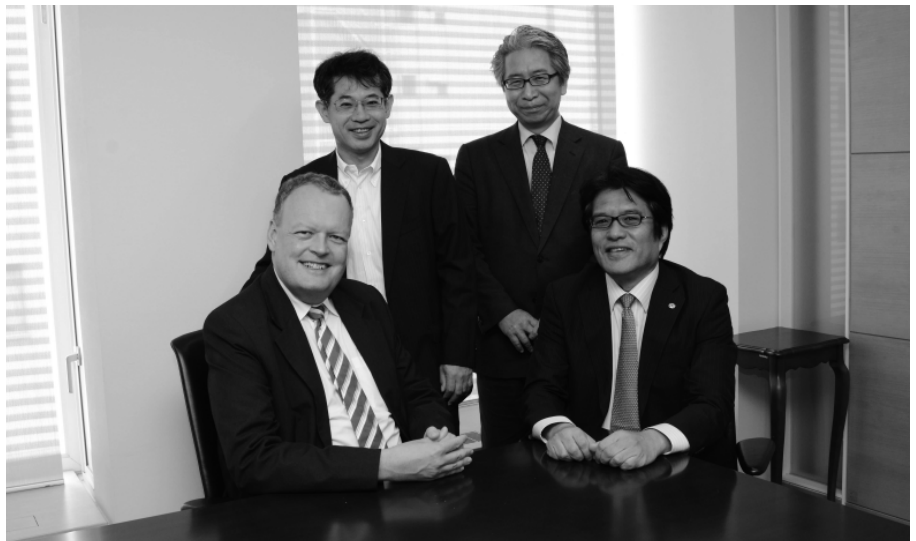
いのうえ あずま  
**井上 東**

(後列右)  
IPSASBボードメンバー

いざわ けんじ  
**伊澤 賢司**

(後列左)  
(前) IPSASBボードメンバー

せきかわ ただし  
**関川 正**



本誌では、2015年8月27日、国際公会計基準審議会 (IPSASB) のAndreas Bergmann議長の来日の機会に、日本公認会計士協会の公会計・監査担当常務理事の井上 東氏、IPSASBボードメンバーの伊澤賢司氏、前IPSASBボードメンバーの関川 正氏にお集まりいただき、Bergmann議長へのインタビューを行った。

インタビューでは、Bergmann議長の任期中のIPSASBの活動の成果や、IPSASBの今後の活動の展望等について、活発な意見交換が行われた。

この機会に是非ご一読いただきたい。

### I これまでのIPSASBの活動 成果の総括

**伊澤** 今回は、Andreas Bergmann議長に10年ぶりに日本へ来ていただき、非常にありがたく思っております。10年前に比べて、日本での国際公会計基準 (IPSAS) に対する関心は非常に高まっていると思います。

特に、Bergmann議長の在任期間中に、世界中でIPSASの普及が進んできたことに関して、日本でも非常に関心を持っ

ています。

そこで、今回のインタビューでは、議長には任期中のIPSASBの活動の成果や今後の活動の方向性について、日本公認会計士協会 (JICPA) の井上常務理事 (公会計・監査担当) にはIPSASBの活動へのJICPAの貢献について、前IPSASBボードメンバーである関川さんにはこれまでのIPSASBに対する日本の関わりについてお聞きしたいと思っています。

まず、Bergmann議長に、これまでの

IPSASBの活動の成果の総括をお願いします。2010年に議長に就任されてからこれまでのIPSASBの活動について、特に、IPSASB概念フレームワークの公表（2014年10月）を中心に振り返っていただければと思います。

**Bergmann** 公共セクターに特定した発生主義ベースの概念フレームワークを開発したのは初めてのことで、これはまさに私の任期の間での主要なプロジェクトであると思います。

公的部門と民間部門との財務報告の主たる違いは、公的部門の財務報告はその利用者がより広範囲であるということです。投資家が政府に対して資金を出しているという立場から関心を持っているだけでなく、一般市民、政治家、あるいは政府職員・官僚なども利用者として大変関心を持っています。

もう1つの主要な違いというのは、政府が持つ資産の多くは、現金を創出させるためではなく、サービスを提供するためにある点です。例えば、政府が学校の建物を建てるというのは、それでお金を儲けようというのではなくて、子供たちを教育するためです。

この2点を除けば、IPSASBの概念フレームワークは、民間セクター、例えば、国際会計基準審議会（IASB）の概念フレームワークとほとんど同じです。この2つの点を強調し、ほかは類似した概念フレームワークを完成できたことを大変嬉しく思っています。

IPSASBの基準はIASBの基準と80%同じで、20%違うという状況です。その20%の違いは、経済的な取引が違うことから生じています。

これは、会計・監査の専門家にとっても非常に重要なメッセージだと思います。民間部門の会計・監査についての訓練を受けた人たちが、公的部門の会計・監



国際公会計基準審議会（IPSASAB）議長  
Andreas Bergmann氏

査に携わるのに際してまったく新たな訓練を受けるという必要性はなく、少し追加的に考え方を研修すればよいということです。

その点に関して、IPSASBはIASBとも緊密に作業をしており、2015年1月には連結に関して5つの新しいIPSASを公表しておりますが、これは、国際会計基準（IAS）と国際財務報告基準（IFRS）をベースにした基準です。

近い将来に基準を作ろうと思っている、公的部門特有のテーマもあります。社会給付とか、文化遺産ですね。これらは政府にとって非常に重要なものです。

最後にもう1つだけ申し上げますと、私の任期の間に、統計コミュニティの方々とも非常に緊密に作業しました。国際通貨基金（IMF）、世界銀行、経済協力開発機構（OECD）のような国際機関が認識したのは、財政統計と公会計についてはできるだけ違いを排除しないと混乱が起きるということで、不要な差異を除去するために、緊密に統計コミュニティと作業しました。

この差異を埋め、少なくしたことが、伊澤さんが先ほど言われた各国での

IPSASの普及の進展につながっていると思います。

**伊澤** ありがとうございました。IPSASBの概念フレームワークという基本的な公会計の考え方が定められたことと財政統計との不要な差異の除去が、IPSASが世界に普及するベースラインを作ったということですね。

## II IPSASBの活動に対する JICPAの貢献

**伊澤** 次の質問に移りたいと思います。公会計に対する関心は日本でも高く、JICPAはIPSASBの活動に強い関心を持ち、貢献もしていると思います。井上常務理事にIPSASBの活動に対するJICPAの貢献についてお話しただけければと思います。

**井上** JICPAでは、IPSASBの活動に大きな関心を持っています。IPSASBに対するJICPAの貢献について、4点ほど申し上げます。

1点目は、ボードメンバーの派遣です。過去には、清水涼子さん、ここにいる関川 正さん、現在は伊澤賢司さんをボードメンバーとして派遣しております。

2点目ですが、JICPAとして公会計委員会の中に専門部会を設置しております。こちらで、IPSASBでの検討状況に関して積極的に議論しています。

3点目は、コンサルテーション・ペーパー（CP）や公開草案（ED）に対するコメント・レターの提出です。コメント・レターに関しては、ほぼすべてのCPやEDに対して、専門部会での議論の後にJICPAの常務理事会で審議し、提出を行っています。

最後の4点目ですが、機関誌である『会計・監査ジャーナル』やウェブサイトにおいて、IPSASBの会議報告、また、基準、EDやCPの解説等を掲載し、広報活動に努めています。

**伊澤** 公会計は、まだ新しい分野です。まず、公認会計士の教育が非常に重要だと思っており、このような活動をしています。

また、先ほど井上さんが言われたとおり、ボードメンバーの派遣や、専門部会を設置して、JICPAが議論をリードすることによって、政府機関等に対して普及啓蒙活動をしています。

### Ⅲ IPSASBのボードメンバーとして苦労したこと、感じたこと

**伊澤** 次は関川さんに、過去のIPSASBのボードメンバーとしての活動についてうかがいたいと思います。関川さんは私の前のボードメンバーとして6年間、実際にBergmann議長と一緒に活動されてきたわけですが、ボードメンバーとして苦労されたことや感じたことをお話いただければと思います。

**関川** 私のIPSASBのボードメンバーとしての任期は2006年から2011年までの6年間なのですが、実は、ボードメンバーに就任したのは、Bergmann議長と同じ時期だったと思います。

**Bergmann** そうですね。

**関川** その当時の日本では、IPSASあるいはIPSASBそのものが、まだあまり知られていなかったと思います。

ボードメンバーの主要な役割は、まずは会計基準を作ることに貢献することだと思うのですが、それ以外にも一種の外交官として、各国でIPSASについてIPSASBを代表して話をすることが非常に重要な役割だったと思っています。

先ほど伊澤さんが言われたように、関係する官庁、財務省や総務省、あるいは会計検査院を訪問して、IPSASBの活動について説明したり、国内でのセミナーなどを開催して広報したりすることに努力していました。

私がボードメンバーになって2、3年経っ



(前) IPSASBボードメンバー  
関川 正氏

て、日本でのIPSASBへの関心は飛躍的に高まったと思います。それは、我々の活動が成果を生んだということもあるし、日本での公会計自体に対する関心が非常に高くなった環境の変化というのもあったと思います。

例えば、財務省や総務省のいろいろな審議会や研究会に呼ばれて、IPSASについて説明してくれというリクエストが非常に増えたり、また、少し驚いたのは、外務省から突然連絡があって、「IPSASとはどのようなものか」と聞かれたこともあります。それはおそらく国連がIPSASを採用したことに関係していたと思います。

また、私がすごく意識していたのは、自分アジアの人間であるということで、日本だけではなく、アジアに対してIPSASを啓蒙するということです。

2006年に私とBergmann議長がボードメンバーになって最初の会議は、2006年3月に東京（公認会計士会館）で行われています。

その時にセミナーを開催しましたが、そのセミナーは日本だけではなく、世界銀行のグローバル・ディベロップメント・ラーニ

ング・ネットワーク(GDLN)というネットワークを使って、アジアの10か国ぐらいに同時中継を行いました。

最近、特に東南アジアの国でIPSASを採用する動きが非常に広がっていると思うのですが、我々のそうした活動が少しでも役に立ったのではないかとすると非常に嬉しいです。

実際に、他のアジア、例えば、タイやインドネシアの方と話していると、IPSASに対する関心を持っている方は非常に多くいます。

IPSASBが公表しているCPやEDに対するコメント・レターは、IPSASBの会議資料でいつも地理エリア別に何通コメント・レターが来たかを分析しています。そうすると、アジアからは大抵1通しか来ていないことが多いです。その1通というのはJICPAを意味しているのです。

ただ、これは文化の違いがすごく大きいと思います。コメント・レターが来ないということは関心がないということでは決してなくて、あまり自分の意見をはっきりと公式な形で表明したくないという、文化の違いの問題があると思っています。

まさに、今、Bergmann議長が取り組まれていることだと思うのですが、単に各国の意見が来るのを待っているだけでなく、実際に訪問して、いろいろな方と直接にコミュニケーションをして考え方を聞くということは、会計基準を設定する上で非常に重要なのではないかと考えています。

ボードメンバーの役割で、会計基準そのものを設定する、議論に参加するという点で若干苦労した点は、日本がIPSASや発生主義会計そのものを十分に適用していないので、そういった実際の経験をバックグラウンドとして会議の場で発言したり、貢献したりするという点が少し難しかったことです。特に、日本には公会計基準



を設定する、例えば、アメリカにある政府会計基準審議会(GASB)などに相当する組織がないので、そういった議論を活用して貢献していくということが難しかった点も挙げられます。

もちろん英語のネイティブ・スピーカーではない人間にとって、英語で議論しなければならないというのも苦労した点です。

**Bergmann** 確かにコメント・レターについては、日本もそうですし、私の国でもそうですが、そういう国や地域においては、まず、理解をするために翻訳をしなければならないかもしれません。それに対して回答をする際には、また翻訳をしなければならないということで、これを1ステップでやってのける英語が母国語の国と比べると、ずいぶんと作業が多くなります。

**伊澤** ありがとうございます。IPSASの普及にあたっては、様々な関係者と直接的なコミュニケーションをとることが重要で、かつて関川さんが日本で取り組まれていたことやBergmann議長が世界で今、まさに取り組まれていることが、IPSASに対する関心を高め、世界中に普及することに貢献したのだと思います。

**Bergmann** アジアもですね。日本だけでなくアジア全体に働きかけてくださったということもそうでしょう。

**伊澤** 私が関川さんの後を継いでボードメンバーになったわけですが、私の時は関川さんの時とは違って、日本の公会計を議論するときはまずIPSASを見ましよう、ということが通例になっています。

総務省で独立行政法人の会計の改革が進んでいるわけですが、そこでもIPSASBの概念フレームワークについては非常に関心が高く、先日、私の方で説明をいたしました。

JICPAとしても省庁との関係を非常に大切にしていると思いますが、そのあたりを井上さんからご説明いただければと思



IPSASBボードメンバー  
伊澤賢司氏

います。

**井上** 今、お話がありましたように、JICPAは、総務省、財務省、会計検査院に対し定期的にIPSASBの活動状況を説明し、意見交換をしてきました。その活動は、今後も引き続き、積極的に実施していくつもりです。

## IV IPSASBの今後の活動

### 1. IPSASBの今後の活動に期待すること

**伊澤** ありがとうございます。では次に、IPSASBの今後の活動について意見交換をしたいと思います。

日本の公会計に関しましても、これまでには普及啓蒙する活動が中心だったわけですが、これからは公会計を活用していくという場面に移っております。

したがって、まずJICPAとして、IPSASBの活動に対する期待について井上さんからお話いただければと思います。

**井上** IPSASBの活動の成果は、日本でも積極的に取り入れていきたいと考えています。

また、日本における公会計の活用事例をIPSASBにフィードバックすることにより、IPSASBの活動に貢献することができると思っています。是非、日本からの意見にも前向きに対応をお願いしたいと思います。

最後に、概念フレームワークを広める活動をさらに推進していただきたいと思います。

**Bergmann** この概念フレームワークというものは、私どもの将来の作業にとって指針となる基盤であります。世界各国に対する重要なメッセージでもありますし、IPSASBに概念フレームワークができたことによって、将来の発展の信頼性が確立したと思います。日本、あるいはJICPAからのコメント・レターは、私どもにとって重要な知恵をいただけるものだと考えています。

そして、新たに設立された公益委員会(Public Interest Committee: PIC)が、IPSASBがデュープロセスに従っているか、すなわち、IPSASBが各国から寄せられた見解を熟慮した上で基準設定を行っているかを、注意深く監視します。このPICは、世界銀行、IMF、OECD、最高会計検査機関国際組織(INTOSAI)がリードしています。

そして、IPSASBと利害関係者とのやり取りをさらに強化することに役立つのが、2016年に設立される諮問助言グループ(Consultative Advisory Group: CAG)です。

**伊澤** 概念フレームワークができたことや、今後のPICやCAGの活動によってIPSASBの活動に信頼性が担保され、その活動がより公明に、利害関係者の意見を取り入れて行われることになるということですね。

それと、先ほどの井上さんの発言の背景を補足させてください。日本のパブリック・セクターでも最近では発生主義に基づく

財務諸表を作っています。

しかし、利害関係者からは、財務諸表を作っても、公共財政の管理に活かしていないのではないかという意見があります。

2015年9月に公表されたIPSASBの2015年以降の戦略及び2015年～2018年の作業計画では、基準設定をすることによって、公共財政の管理(Public Finance Management)に活かしていくということがいわれております。そこで、Bergmann議長のご意見として、IPSASがどのように公共財政の管理に活かせるかということについてお話いただければと思います。

**Bergmann** 公共部門、そして一般国民が財務諸表をしっかりと見る、そして意思決定者がその情報をしっかりと活用するということが重要でしょう。財務諸表というのは、30頁から50頁ぐらいで、政治家やメディアはわざわざこれを全部読んで、「28頁に重要な情報があつた」というようなことを見つけることはしません。ですから、完全な財務諸表に基づいた短縮版を作って、最も重要な点を意思決定者や一般国民に提示するということが重要でしょう。

それから、セカンドステップとして、発生主義の財務諸表でしか得られない分野に関して財務諸表の有効な利用方法について語るということが必要でしょう。例えば、政府にとって投資の水準が非常に重要であり、投資水準が高いとか低いとか、あるいは、適切な投資水準はどの程度かということを中心に理解するためには、発生主義の財務諸表が本当に必要だというような説明です。偶発債務を例に説明するのもよいでしょう。

**伊澤** ありがとうございます。財務諸表を利害関係者に分かりやすく説明していくということと、意思決定に有用な情報に焦点を当てて会計を活用していくことが重

要なのではないでしょうか。

## 2. IPSASBとIASBとの関係

**伊澤** 次に関川さんから、IPSASBの今後の活動について、基準設定という観点でBergmann議長にお聞きになりたい点がありますでしょうか。

**関川** まず、今後、IASBとIPSASBの関係がどうなっていくのかということについてお聞きがしたいと思います。

先ほど議長が言われたように、IPSASBの基準の80%ぐらいはIASBが作った基準をベースにしていると思います。私がIPSASBの中で議論している時も、IASBとIPSASBで最初から共同でプロジェクトを進めた方がよいのではないかと考えるものもいくつかありました。

また、IPSASBの概念フレームワークができたことと、あるいは、先ほど議長が言われたPICやCAGのような機関が設置されてIPSASBのガバナンスが変わったことが、IASBとIPSASBの関係に何か変化をもたらすと考えているかについてお聞きがしたいと思います。

**Bergmann** 過去6年の間に、IASBとIPSASBの間は非常に成熟したと考えています。両方のボードが、お互いに同様の仕事をする同等の存在として、ただ、相手にしているセクターが違うという見方をしていると思います。単に私どもがIASBをフォローしているというだけではなくて、向こうも私どもの作業を見えています。IASBはまだ概念フレームワークのプロジェクトを完了していませんから、私どもの作った概念フレームワークを参考にしていますし、私どもも同様に様々なIASBの作業を参考にしています。ですから、成熟化したということがいえるでしょう。

排出権取引制度に関しての例が1つの良い例なのですが、IASBとIPSASBは一緒に作業をやっています。どちらが追隨しているというのではなくて、同じスピー

ドで作業を進めています。

IPSASBのガバナンスの構造の変化は、IASBとの関係に影響を及ぼすということはないと思います。これはまったく別の話だと思っています。

IASBが我々のCAGに参加できる、そして、我々が向こうのアドバイザー・カウンシル(諮問会議)に参加できるということはもちろんありますが、スタッフは日々の業務の中でもっと緊密に協力しあっています。

## 3. 各国におけるIPSASの適用の在り方

**関川** もう1点は、これからIPSASの適用がいろいろな国で進んでくるとは思います。必ずしも純粋な形でIPSASを適用するケースだけではないように思います。民間の会計基準以上に政府の会計基準というのはその国の法律や予算制度の影響を受けるので、多くの国が多少IPSASを修正して適用するような形になってくることが多いと思うのですが、その点についてはどのような見解をお持ちでしょうか。IPSASはあくまでも純粋な形で適用されるべきという考えをお持ちなのか、それとも、国の事情によってそれぞれがIPSASをベースにして多少の修正をした形で適用することも差し支えないと考えるのかということについてご意見をお聞きがしたいと思います。

**Bergmann** まず理解しなければならぬのは、国際的な基準を各国に導入するという場合には、国際的な基準は、国の基準(ナショナル・スタンダード)を通じて導入されるという点で、これはIPSASだけの話ではなく、IFRSもそうだし、それから、監査の基準もそうなのです。これは一般的に行われていることで、それは受け入れざるを得ないでしょう。国家の主権を尊重しなければならないわけですから、もちろん私どもとしては、国の基準がIPSAS

に準拠していなければならないと考えるわけですが、例えば、IPSASの方で2つのオプションを提供しているときに、国の基準では2つのオプションを提供せずに、1つのオプションだけしか与えないということをしたとしても、これは準拠しているということです。ですから、問題はありません。ただ、私どもが問題視するとすれば、何らかの要求事項があって、それを外してしまう、変えてしまう、あるいは、また新しいものを導入してしまうということになれば、その実体が変わってしまうということで、これはもはや準拠しているといえなくなるわけです。ですから、そのプロセスを理解しなければならぬわけで、これはIFRS等でもそうです。その適用等のプロセスにおいては、例えば、オーストラリアにあるのはオーストラリア版のIFRSで、ニュージーランドにあるのはニュージーランド版のIFRSです。そういう形で導入していて、オプション等は減らしていたりすることがしばしばあります。

**伊澤** ありがとうございます。今後もIPSASBとIASBは緊密なリレーションシップをとっていくと思います。また、日本の公会計もそうですが、各国でどのように国際基準を取り入れていくかに関しては、より透明性が問われるということなのでしょう。

## V 日本の公会計の取組みに関して今後期待すること

**伊澤** 現在の日本の公会計は、「作成する」から「活用する」という段階に来ているということは非常に重要だと認識しております。最後にBergmann議長から、日本のパブリック・セクター、若しくは公会計の取組みに関して、今後期待することについてメッセージをいただければと思います。

**Bergmann** 日本は長い伝統を持って、優れた統治制度と政府が存在していると思います。こういう伝統がある中で非常に大事なものは、意思決定をするまでに十分に検討することだと考えます。ただ、私は日本がその熟慮の結果、発生主義会計に移行することと、また、おそらくいつかは、予算制度も発生主義に移行することに関しては自信を持ってそう言えると思います。スイスも同様なのですが、最初は変化に少し躊躇する向きがあります。ただ、これが実行可能であって、持続性があるといったん確信すると、それを着実に導入していることになります。日本もそういう結論に達することができれば、非常に高品質で、完全なIPSASへの移行を遂げられると確信しています。

**伊澤** ありがとうございます。Berg-

mann議長から、日本の公会計をより強く改革していくことが必要だというメッセージをいただいたと思います。最後に井上常務理事から、今のBergmann議長のお話を受けまして、今後のJICPAの取組みについてお話いただければと思います。

**井上** JICPAは、今後も高品質なIPSASの策定をはじめとするIPSASBの活動に積極的に貢献していく所存です。今日は、Bergmann議長に大変貴重な示唆に富むお話をいただきまして本当にありがとうございました。



日本公認会計士協会  
公会計・監査担当常務理事 井上 東氏